

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 村上春樹 『アフターダーク』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 94 回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹さんの『アフターダーク』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『三人の兄弟』

ハワイにある島に流れ着いた兄弟の話。石を転がしながら神様の言う高い場所を目指す、第二人は途中で魚の獲れる場所、果物が獲れる場所に落ち着く事にする。そして長男は上を目指す。(P.26)

頂上には世界を遠くまで見渡す事が出来るが、長男はそんなに見たかったのかな？世界を見渡す事がそんなに大切な事かどうかは分からないけど、きっと長男は使命感のようなものがあって目指すしかなかったのかも知れないなと思いました。

周りが期待する自分、長男の像を作ってしまったいて上を目指すしかないし、二人の弟が、途中で諦めてたために責任感が増したのかもしれない。

エリもきっと、周りが期待する自分であることに疲れて眠ってしまったのかもしれないと私は思いました。

本当のエリを誰も知ろうとしないような印象を受けました。

姉妹でも一人一人の人間だから違うし、一緒ではないけれど芯の部分は同じ通じるものがあるように思いました。

マリのように生きてみたいという気持ちもあったのかもしれない。

マリはマリで辛い気持ちもあって、お互い自分の中身の部分を知ろうとして欲しいというふうになっていたのかなと思いました。

今回も分からない所が沢山あって、私の印象に残ったのは兄弟のお話でした。

特に分からなかったのは P.226 の

(引用はじめ)

論理と作用の相関係について思考を巡らせている。論理が作用を派生的にもたらすのか、あるいは作用が論理を結果的にもたらすのか？

(引用おわり)

スルーしても大丈夫なのかもしれませんが分からなくて少しモヤモヤします。
読書会で解説していただけたら嬉しいです。

(おわり)

わたしにも 19 歳の夜があった

眠れない夜がある。

自分の進路はこれでいいのだろうか、いったいなにからはじめればいいのかという、どこか知らない場所から送られてくる「正しい大人になれ」みたいなプレッシャーを、19歳の頃のわたしは感じていた。

だからマリが男の子みたいな格好でデニースで本を読んで過ごしていることは、なんだかわかる気がしたし、当時の自分なら真似してみたかったなと思った。それができなかったのは、勇気もなかったし、孤独と向き合うことが怖かったからのような気がする。

夜の街のきらびやかさにはまり込んだら別の世界にすっぽり引き込まれてしまう。一人で過ごしたことはないけれど、単に好奇心から、友達とクラブで朝まで意味のない会話を繰り返す、身体に悪そうな強めのお酒を飲んでみたり、おいしいなんてわからない煙草を吸ってみたり。そのそばで何を考えているのか一見穏やかだがどこか実態のない年上の大人の男の人がたくさんいた。高橋や白川みたいな。

多くの女の子はきっと、自分を性の対象としてみていることを「知的好奇心」などと言いながら近づいてくる優しい男の子に警戒したり、近所の美人で頭のよい気立てのいい子なんかと比較されて自分がなんだか完全に仕上がっていない不良品みたいな気持ちになったりするものだと思う。そんな体験のあれこれがこの小説のなかではひと晩に起きている。

青春の頃の女の子は、なかなかしんどいもので、若くてかわいいからと呑気にいられるわけじゃない。

自分も通過したことだからわかる。そんなもやもやとあやうい19歳の女の子がそばにいたらアルファヴィルのカオルさんのように、つい面倒をみたくなるし、深夜のバーでペリエの一杯くらいおごってあげたくなるだろう。けれどそんなことを実践したら、渋谷や新宿なんて、わたしの財布が空っぽになっても追いつかないくらい、あやふやな19歳があふれているんだろうな。そう思うとなかなかやりきれない。

世の中の女の子たちが、夜の街を彷徨ったり、覚めない眠りに落ちこまないように、高校生くらいになったら、村上春樹から読み始めるといいのかな。いつの間にかあちら側の世界へすっぽり落ち込まないように。

この世は現象だ。輪廻がなくても怖がる必要はない。

マリが読んでた厚くて重たい本は、きっとカントだ。

(おわり)

『 その男、高橋 』

この小説の浮遊感、とらえどころのなさ、登場するすべての人物と繋がっている「高橋」が一見凡庸であるからだと思う。音楽に見切りをつけ、弁護士への道へ進もうとする各々が持つ個性やアクを取り除いた若い男性の権化みたいな人物が高橋だ。だから、物語の冒頭で、夜中のファミレスに独りで読書する、クセの強そうな浅井マリに感情移入しようとする。マリとのただの通りすがりのような意味のない会話から、高橋は害のない登場人物かと早々に判断してしまう。

しかし、アルファヴィル管理人のカオルの登場から、だんだんと高橋の存在感が出てくる。「高橋とは…何ぞや？」

アルファヴィルでの一件で、殴られた中国人女性にシンパシーを感じるマリ。マリと何の接点もなさそうだが、マリの分身でもあると思う。同じ十九歳だが、他国で男性の逆鱗にふれ、ボコボコに殴られても訴えられない仕事をする中国人女性。何かに追われ、全国のラブホを転々とするしかない元OLのコオロギも、マリの一側面かもしれない。マリというより、何かの拍子に足を踏み外しかねない女性の末路だ。

対して、中国人女性を殴った白川は、一見凡庸な高橋の狂気の側面だ。ただ、大方の男性は狂気の出し入れに注意するが、密室の匿名の世界での売春でタガがはずれる。その白川には、妻のために好みではないローファット牛乳を買う夫の側面もあり、たぶん妻は女性を殴ることができる狂気を知らない。内面に何を持ち合わせているか、視覚ではわからないのだ。マリの完璧に見えた姉のエリも「白雪姫」を期待されるがゆえに、孤児の経験のある高橋と同じく、自分を殺し続けていた。

偶然出会った夜に、エリは高橋と同じ匂いを感じて、アルファヴィルに入ったのかもしれない。しかし、「知的好奇心」でラブホに入る高橋と寝たエリは壊れてしまった。それは、留学先の住所を教えたマリの行く末かもしれない。エリが少しずつ、目覚めようとしているのは、マリにそれを伝えて救うためのようにも思えた。

凡庸な人間なんていないのだ。物語の表層では「高橋」という害のない人間だが、ドローンのように視点をひいたカメラで視れば、様々な側面がある。

「逃げられない。」と繰り返す電話の主は、中国人組織ではなく、お天道様なのかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『深海の生物たち』

(引用はじめ)

『深海の生物たち』というドキュメンタリー番組だ。音声は消されている。彼はヨーグルトを口に運びながら、無表情にテレビの画面の動きを追っている。しかし彼の頭はそれとは違うことを考えている。論理と作用の相関関係について思考を巡らせている。論理が作用を派生的にもたらすのか、あるいは作用が論理を結果的にもたらすのか？ 彼の目はテレビの画面を追っているが、本当は画面の遥か奥にあるものを見ている。P.227

(引用おわり)

タワーマンションに住んで、熱帯魚を飼ったり、深海魚のビデオを見入ったりするのは、都市生活特有の現象だと思う。論理と作用の相関関係を突き詰めるような頭脳労働をしていれば、何も考えないで泳いでいるような魚たちに癒やされるのかもしれない。人が深海魚のようなものから徐々に進化したとすれば、かつてそうだった自分を振り返るような、なつかしさでもって魚を眺めるだろう。

8月31日の午前2時半頃、奈良県で3台のバイクに乗った8人の男女が、信号無視をしたあと、高架橋の道路上に倒れていたという。朝のニュースで報じられていた。彼らに内部で何が起こったのか？ 大事故で、6名の若者のつゆと消えた。

(引用はじめ)

結局のところ、すべては手の届かない、深い裂け目のような場所で繰り広げられていたことなのだ。真夜中から空が白むまでの時間、そのような場所がどこかにこっそり暗黒の入り口を開く。そこには私たちの原理が何ひとつ効力を持たない場所だ。いつどこでその深淵が人を呑み込んでゆくのか、いつどこで吐き出してくれるのか、誰にも予見することはできない。P.260

(引用おわり)

檀一雄の『花筐』。夜光虫の光る海を沖まで泳いで戻ってきたら、鵜飼の前からは、みんないなくなっていた。

8月31日。今年の夏も、今日で終わりだ。裂け目に落ちていくものは他人事ではない。私の中にも白川の残酷さは、確実にあり、暴走する無軌道さも、かつての自分の中に感じたものだ。壊れた魂の救済。なんやの、それ。わからへん。アイロニーだけが残されている。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343